

現

【特集】2001年現代日本詩集

清岡卓行、宗左近、杉山平一、秋谷豊、平林敏彦、辻井喬、牟礼慶子、中村稔、安水稔和、
新川和江、飯島耕一、大岡信、川崎洋、白石かづこ、中江俊夫、藤富保男、安藤元雄、
粕谷栄市、岩成達也、高良留美子、新井豊美、天沢退二郎、北川透、高橋睦郎、清水昶、
吉増剛造、佐々木幹郎、荒川洋治、吉田文憲、井坂洋子、藤井貞和、瀬尾育生、池井昌樹、
稲川方人、ねじめ正一、平田俊子、江代充、建畠哲、福岡健二、吉田加南子、野村喜和夫、城戸朱理、
守中高明、白石公子、木坂涼、長谷部奈美江、法橋太郎、松本圭二、和合亮一

＊特別掲載＊日蘭二国連詩の試み
大岡信、高橋順子、谷川俊太郎、多田智恵子
ウィールクステルス、ヒューブ・ビュウルス、ケンス
ベーター・ファン・リール、ヨーク・ファン・レウフェン

(訳：近藤裕子)

代

＊新春対談＊入沢康夫×安藤元雄
＊手帖時評＊岩成達也
＊詩書月評＊笠井嗣夫
＊詩誌月評＊広瀬大志

2001
JANUARY
Monthly

詩

GENDAISHI TECHO

手

帖

現

【特集】2001年現代日本詩集

清岡卓行、宗左近、杉山平一、秋谷豊、平林敏彦、辻井喬、牟礼慶子、中村総、安水穂和、
新川和江、飯島耕一、大岡信、川崎洋、白石かずこ、中江俊夫、藤富保男、安藤元雄、
粕谷栄市、岩成達也、高良留美子、新井豊美、天沢退二郎、北川透、高橋睦郎、清水昶、
吉増剛造、佐々木幹郎、荒川洋治、吉田文憲、井坂洋子、藤井貞和、瀬尾育生、池井昌樹、
稲川方人、ねじめ正一、平田俊子、江代充、建畠哲、福岡健二、吉田加南子、野村喜和夫、城戸朱理、
守中高明、白石公子、木坂涼、長谷部奈美江、法橋太郎、松本圭二、和合亮一

＊特別掲載＊日蘭二国連詩の試み
大岡信、高橋順子、谷川俊太郎、多田智恵子
ウィールクステルス、ヒューフ・ビュウルスケンス
ベーター・ファン・リール、ヨーケ・ファン・レウフェン

江苏工业学院图书馆
藏书章

＊新書対談＊入沢康夫×安藤元雄
＊手紙時評＊岩成達也
＊詩書月評＊笠井嗣夫
＊詩誌月評＊広瀬大志

2001
January
Monthly

詩

GENDAISHI TECHO

手

帖

田村隆一全詩集

好評重版

菊判 一五〇〇頁 布製貼函入 本体二二〇〇〇円

まさに戦後詩の主コンメントといつべき全詩集である。

……ここでは、まるで真泉の国から戻ったみたいに、詩人が生き生きと、直立して、詩とともにある。(朝日新聞)

ページを繰るとあらためてこの詩人の力量に驚かされる。世界への透徹したまなざしと観念的な感性を見事に表現するすぐれた言語感覚が、いくつもの印象的な詩句を生み出している。(読売新聞)

日本の詩語の変遷が手に取るように浮かび上がっている。

田村隆一という一人の詩人を越えて、ここには戦後日本の歴史がある。(毎日新聞 佐々木幹郎)

全詩集刊行で戦後を象徴する詩人の多様性を再発見する条件が整ったといえそうだ。(日本経済新聞)

「戦後詩」という日本文学固有の不思議なジャンルをひとりの詩人の名前で代表するとしたら、田村隆一以外には考えられない……そしてこの『全詩集』の中には、

戦後詩の技法と感受性とその運命のすべてが詰め込まれている。(週刊朝日「週刊図書館」高橋源郎)

四十の日と夜から帰ってきた旅人まで、全既刊詩集28冊と、戦中戦後未収録詩篇102篇を収録。詳細な年譜、書誌を付した決定版全詩集。某II飯島耕一、大岡信、新倉俊一、吉岡剛造。

田村隆一

本体二四〇〇円 本体二四〇〇円

討論と代表作50選は北川透、佐伯論と代表作50選は北川透、佐々木幹郎、三浦雅士の三氏、同時代評に吉本隆明、平出隆、同時代評に吉本隆明、平出隆らの詩人論。

の書き下ろし新稿を加えて田村隆一、新稿を加えて田村隆一の壮大な詩業を俯瞰。セイも多数収録。



●増頁特別定価……一、八〇〇円

●増頁特別定価……一、八〇〇円



【特集】

2007年現代日本詩集

新春対談

入沢康夫
安藤元雄

心のふるえ、魂の揺れ
詩の新世紀へ

058

作品I

宗左近
杉山平一
清岡卓行
辻井喬
平林敏彦

乖離 中句二〇一句
帰りたい 他五篇
選ばれた一瞬 岡鹿之助「滞船」に
群島
冬の手紙

016
024
010
027
030

作品II

中村稔
秋谷豊
牟礼慶子
藤富保男
新川和江
飯島耕一
川崎洋

精霊たちが浮遊する風景
わが辺境
詩人の仕事は……
風の尾
組詩 良寛
脱腸亭日乗 断片 断腸亭の在りし日も遠く
ジンをひとつたらし

036
033
038
042
076
046
056

1 月号

January
2001

大岡信 高橋順子、谷川俊太郎、多田智満子 奥深いチーズの味の巻
ウィール・クステルス、ヒューブ・ビュルスケンス、
ヘーター・ファン・リール、ヨーク・ファン・レウフエン 銅の丸振り子の巻 訳 近藤紀子

大岡信

白石かずこ

安水稔和

中江俊夫

岩成達也

柏谷栄市

新井豊美

安藤元雄

高良留美子

北川透

天沢退二郎

高橋睦郎

古増剛造

清水昶

藤井貞和

佐々木幹郎

瀬尾育生

吉田文憲

建畠哲

世紀の変わり目にしやがみこんで 他一篇

現しめよ 雪ひらひら、天の手紙

花沢

八篇

寄る辺

*

十月／水辺

啓示

他一篇

つる薔薇のつる

秋は柿の実

夢見

道化の秋

ハニバル

舟のイメジによる七つの詩

古仏道元へ

俳句航海日誌

現代詩俳句抄

ぼうやのかたわらにやつて来て

終末の日には

大使たち

時の皮膜の「ちいさな影」の、生きる場所

田舎の大いなる光

ねじめ正一

がつこう 小詩集

196

吉田加南子

しずく

204

荒川洋治

心理

208

井坂洋子

好事 他一篇

222

稲川方人

聖書、反詩、水物語覚書 異稿α

214

福岡健二

ジブリル

216

野村喜和夫

デイトップフィールド2001

230

江代充

窓辺

238

池井昌樹

桃李 小詩集

225

平田俊子

Eメール

240

木坂涼

尺取虫

244

城戸朱理

世界の果て World on the Edge

246

長谷部奈美江

うつわ

250

守中高明

吊鐘

253

白石公子

前輪まかせ

256

法橋太郎

魂の書

258

松本圭二

赤い小冊子

266

和合亮一

豪雪

260

多田道太郎

新訳・ボードレル「パリの鬱々」Le Spleen de Paris
射的場と墓地／後光喪失

122

岩成達也

ある終焉

手帖時評

笠井嗣夫

「夢」を拒否すること

詩書月評

広瀬大志

2001口徑新世紀銃

詩誌月評

吉田加南子

幸福論II**

幸福論

河津聖恵

詩は「恋愛」になれるか

新連載 インターポエティクス21 原理

平居謙

「21世紀新型ホップPOEM宣言!」の巻

ビジュアルPOEMを探して

福岡健二

高橋睦郎「交換」曖昧さの拒否

同時代レッスン 一篇の詩を読む

宮川匡司

「ひとけき生」を見つめる眼差し

中村稔「スキの下かげ」

澤田直

詩人の手

「飯島耕一・詩と散文」第1巻

篠丸けい

旅をする台所

伊藤比呂美「またたび」

有働薫

これを終わりとせず、始まりとして

ア・エチエンヌさんを囲んで

ヤリタミサコ

場を共有すること、コトバを共有すること

詩を遊ぶ／谷川俊太郎さんといっしょに

新人作品

1月の作品

清水基、峠谷光博、雨森沈美、酒井秋爾、

李炎、江夏奈穂、小林一晴、松本陽子

岩成達也

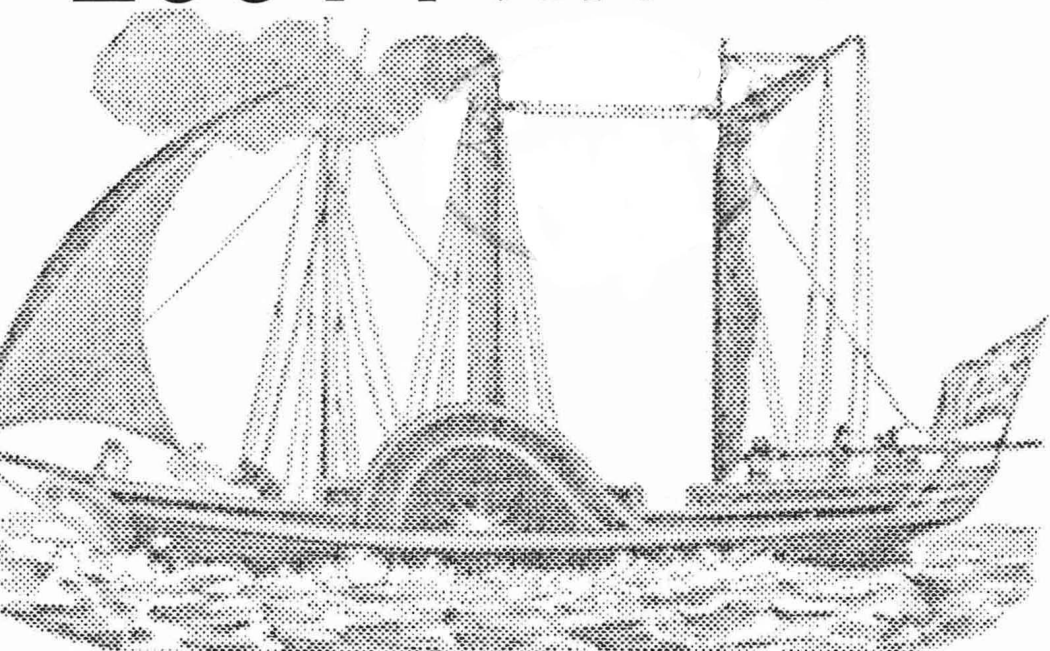
固有感の溶解

横木徳久

新人欄用説教集

現代詩手帖

2001年現代日本詩集



選ばれた一瞬

岡鹿之助「滞船」に

清岡卓行

ある個展の会場に入るとすぐ現われた
おおきな横長の矩形の油彩の風景。

それは海辺の家の室内にいる人間が眺める
ひろびろと開かれた窓からの空と海と陸と
そして 目近な窓のあたりの光景。

そんな遠近のひろがり

風いだ海を中心として

画面には見えない太陽に照らされ

燦爛と輝いたり

おだやかに息づいたりしていた。

なんという静けさ。

孤独でにぎやかな音楽が

いま終わったばかりであるかのように。

あるいは ひそかな郷愁の音楽が

まさに始まろうとしているかのように。

このタブローの前でわたしが茫然となった一瞬からもう三十三年も経っている。

しかも その驚きの反芻が

いまなおつづけられているのだ。

それはほんのときたま

数年に一度のわりあいではあるが

また それは精巧な原色版とはいえ

複製の絵によるものではあるが

わたしは多忙な生活における

多くは偶然の機会にいそいそと飛びつき

新しくされる深い憧れから

なじみの執拗な探索へと

くりかえし舞い戻るのである。

遠景では、水平線上に厚く長くたなびく雲、そこからいくつも湧く球形に近い雲、その上にちぎれ雲の浮かぶ果てのない青空。中景では、鏡に近くあけぼの風いで日光を反射する広大な海、そこに安らぐあけぼの色の帆の滞船三隻、それらが海にそれぞれ落とす暗く涼しげで透明な、ほぼ三角形の影。近景では、海辺の右手の小高い所にある小さな教会、その回りに立つ三本の椰子の木。目近な窓の下枠の外側では、斜め右に下降している手摺り、その内側では、両開きにした水玉

模様のチュールのカーテン、そして、熱帯ふう
観葉植物の植木鉢。

どこにも人影がないではないか。

物語はいま秘められている。

いま人間が見えてはならない。

宗教も 歴史も 哲学も 文学もいらない。

ひたすら線と色と形と

それらの組み合わせだけで

もしかしたら音楽は例外的に重なるかもしれないが

キャンヴァスに端正な秩序をもたらすこと。

線と色と形すべての連関が

静謐な淨福を創りだすこと。

感覚から精神にいたる体系こそが望ましい。

作品の全体としての生氣のために

もし神秘的ななにかが足りないとするなら

偶然の恵みを待つこと。

それにしても画家は

この油彩を制作しはじめるに足りるふしぎな一瞬に
いつでもめぐりあつたのか。

垂直な線は帆柱、椰子の木、教会の建物の数
個所、手摺りを支える棒、植木鉢左右の縁、そ
のほか。水平な線はちぎれ雲のいくつか、水平
線そのもの、帆の上下の辺のたいてい、波打際

の一個所、教会の建物の数個所、窓の下枠、植木鉢の上の縁、そのほか。

これらが顕在的にも潜在的にも直角、へ完璧なもの一つの象徴である直角を、豊かにばら撒いている。教会の鐘楼の上の十字架は、ささやかながら画面の中央に近く、海を背景としてそのことを暗示しているよう。

円に近い曲線は湧きあがる雲。なだらかな曲線は海辺の起伏、観葉植物の幹や枝や葉、カーテンのたわみ、そのほか。円と呼べるほどのものは小さな模様の水玉。

鋭くても優しくても不安定な斜線や斜角は、帆の左右の辺のほとんど、海に落ちた船影の辺のいくつか、教会の建物の数個所、手摺りの本棒、そのほか。

これらすべての線、角、また円は、そのおびただしい存在をシンフォニックに響かせあっている。この場合もちろん、それらは色と、色をもたらす色面と、そして色面がもたらす形と深く噛みあっている。

色はすべて穏やかでいくぶん地味であるが、晴朗の雰囲気の中にある。眩しい日光を浴びて、青い空にも白い雲にも淡く明るい灰黄がかり、とくに海は淡くすんだ黄にきらきら輝いて、波打際に近づくにつれ淡い青緑に移って

いる。滞船の帆は曙色、帆柱や舷側^{げんそく}は茶色。教会の屋根、椰子の幹、窓の下の壁、観葉植物の根元などは、さまざまに茶色ないし焦茶色。椰子の葉、観葉植物の葉、植木鉢、海辺の草などはさまざまな緑。砂浜は淡い砂色。透き通る黄みの白のカーテンの水玉模様はごく淡い灰緑。

これらすべての線と色と形が

好みの油絵具を擦り込むような点描の

憑かれたようなリズム

それも無窮動に近い幸福な苦行のリズムによって

人事と自然の美しいといえるほどの均衡にまで

あるいは すべての人を迎えるにたりる

その無人の静けさにまで

堅固かつ柔軟に

組織されていたのであった。

まさに油彩のオーケストレーション。

わたしは三十三年も

ときたまの断続的な探索ではあるが

そのときどきは熱烈に

画家の自立の基点ともいうべき

この油彩の核心となっている詩を求めた。

また かれのほかの作品も眺めながら

この世に対する

かれの魂の最も奥深い構えはどこにあるのかと
関心を二重にするようにもなった。

そのためわたしは画業だけでなく
家系や愛情関係から健康や趣味にいたるまで
かれの人生全体を研究した。

その知識は一冊の評伝を書くにたりるだろう。
しかも 求めつづけた問題の核心の詩は
ついに捉えられなかった。

できることなら いつの日か

わたしは蓄積したそれらの知識を
うまく無意識化した状態のなかで
あの油彩の実物に再会してみたい。

そして あらためて

あの生々しい絵肌エダの全容に打たれ
かつて茫然となったあの一瞬を

感覚的に新しくしてみたい。

そのとき

わたしにどんな思いが生じるかはわからない。

しかし そのとき

わたしの新しい一瞬が

画家をあゝの油彩の制作へと駆り立てた古い一瞬に
いくらかでも重なるのではないかという
そんな望みが

あの滞船の行先のように残っている。

乖離^{かいり}

中句
101句

宗左近

I 別の引力

ここどこそ摺めるむこう 去年今年^{こそことし}

去年今年 石臼で挽く白い霜

雪達磨^{うしろむ} 後向きの目玉を嵌められて

墓^{ひまがえ} 永眠だって冬眠なのだよなあ

噴きあがらぬ青い血 土筆^{つくし}を引き抜いて

火葬場を火葬すれば来るだろう 春